国指定
建造物

八千代座
やちよざ

国―1

所在地
山鹿
字上東

地図
P.141 1

写真提供　原口カメラ

八千代座外観

天井広告絵とシャンデリア

舞台から見た客席

明治四十三（一九一〇）年に竣工し、翌年の一月に「こけら落し」が行われました。

繁栄していた温泉宿場町の面影を残す豊前街道から少し入った所に立派な劇場が堂々と建っています。当時の町人達が、株を発行し財源として建てたもので、当初の八千代座は江戸時代の様相をした建物でしたが何度も改造が行われ現在の姿になっています。

演劇などが廃れる中、八千代座も他の劇場同様、芝居小屋では営業できなくなり、一時期は映画館として活用された事もありました。その後は衰退の一途をたどり、建物の朽ちていく姿を見かねた有志達が立ち上がり、瓦一枚運動を皮切りに、復興の気運が高まって、雨漏り修理や

せり

奈落

修理中の八千代座（屋根のトラスとぶどう棚）

花道下の通路

花道

棟札

明治 44 年の奉納額

内部の清掃などを行って辛うじて守られていきました。その甲斐あって、昭和六十三年十二月に、国の重要文化財の指定を受け、平成九～十三年の「平成の大修理」によって、大正十二年頃の姿に復原されました。

内部に一歩足を踏み入れると、豪華絢爛（けんらん）さに驚かされ、天井には当時の広告絵、中央には洒落（しゃれ）たシャンデリアが目を引きます。升席も工夫を凝らしてあり、後席からも見やすくするために前席より少しずつ後席が高くなっています。そのほか回り舞台、花道、ぶどう棚など芝居小屋ならではの見所が随所に見られます。特に回り舞台の下の仕組みに興味をもつ観光客も少なくありません。

現在は、歌舞伎をはじめ色々な公演も行われ、毎回満席の反響を得ています。

（五嶋）

国指定
考古資料

方保田東原遺跡出土品

かとうだひがしばるいせきしゅつどひん　国―2

所在地
方保田出土文化財管理センター
鍋田　博物館

地図
P.141
2
23

鉄器

青銅器

石杵

内面朱付着土器

方保田東原遺跡出土品はこれまでの発掘調査で出土した遺物のうち土器・土製品四二九点、金属製品三七一点、石器・石製品五四点、貝輪二点、ガラス玉九六点の総計九五二点で構成されます。これらの中で特に注目されるものは、多数の鉄器及び鉄器製作関連遺物と、赤色顔料調製に関する資料です。

鉄器には石庖丁形鉄器、鎌、穂摘具などの農具、斧、鑿、鉋などの工具のほか、鏃、剣、鉄針などがあります。特に石庖丁形鉄器は方保田東原遺跡でのみ出土している貴重な資料です。

また、赤色顔料調製関係資料には、顔料が付着した石杵や敲石などと、土器（赤色顔料付着土器）があります。朱（水銀

家形土器

土製玉

土器（弥生時代後期）

土器（古墳時代前期）

朱）やベンガラ（酸化鉄）の調製に使用された道具と考えられます。

このほか、巴形銅器や小型仿製鏡、破鏡などの青銅器も見つかっており、いずれも墓ではなく集落内で見つかっていることが特徴です。

方保田東原遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期に使用された土器が大量に見つかっています。そのうち、状態の良好な資料、他地域の影響を受けた資料、類例の少ない資料が指定を受けています。

方保田東原遺跡出土品は日本の多様な弥生文化のひとつのあり方を示すものとして、学術的価値が高い資料として評価されています。

（事務局）

国指定
史跡

チブサン・オブサン古墳

ちぶさん・おぶさんこふん　国―3

所在地
城
字西福寺

地図
P.141 3

チブサン古墳玄室奥の石屋形

チブサン古墳は、今から約一五〇〇年前（六世紀前半）に造られたとされる前方後円墳です。築造当初は、周囲に溝を巡らし、墳丘には石を葺き、埴輪や石製装飾（石人）を置いていたようです。

古墳内部は横から入る石室があり、奥の部屋（玄室）には遺体を安置する石屋形が置かれています。その正面と左壁には、円や三角や菱型の連続した幾何学文様が、右壁には、両手と両足を広げた人物の装飾などが描かれています。装飾は、赤・白・黒の三色が使われ、色あせることなく、現在までその鮮やかさが残されています。

正面の二つの円文から、「乳房さん」と呼ばれ、古くから「お乳の神様」として信仰の対象となっていました。それが、チブサンという名の由来とも伝えられています。

オブサン古墳は、六世紀後半頃に造ら

石屋形正面の装飾（円・三角・菱形）

石屋形右壁の装飾（人・円など）

チブサン古墳　後円部

石屋形左側の装飾（菱形・円）

れたとされる円墳です。墳丘は、石室に向う道の両脇が突き出るという、特異な形をしています。内部は大きな板石を組み合わせた石室が造られていて、床の仕切り石には一部装飾が見られます。

（事務局）

オブサン古墳

国指定
史跡

鍋田横穴群

なべたよこあなぐん

国―4

所在地
鍋田
字東ほか

地図
P.141 4

27号横穴の装飾

岩野川対岸からみた横穴群

国道三号から西に走る国道四四三号を二キロほど進むと岩野川（菊池川支流）沿いの崖面に開口する横穴群が見えます。これは肥後の古墳時代の最後を飾る群集墓です。形も大きさも、入口の飾り縁も様々あり、その違いを見較べながら散策するのも楽しいものです。

国道 443 号沿いの横穴（6～14 号横穴）

7 号横穴の装飾（弓）

14 号の装飾（靫）

その数六一基。うち一六基の横穴の外壁や玄室には、色々なモチーフの装飾が浮彫で表現されています。

二七号横穴では、まず、左外壁の弓を持つ大の字形の人物像が目に付きます。ノミの痕が力強く、この墓室の番兵の姿と思われます。その左下方に向って矛や鞆（とも）（弓の弦はじきを防ぐ革製の弓具）、刀子や矢を入れた大小の靫（ゆき）、さらに盾や馬の絵などが彫られています。

これは、外敵や悪霊から死者を護る鎮魂の構図と考えられるようです。（轟木）

国指定
史跡

弁慶ヶ穴古墳

べんけいがあなこふん

国―5

所在地
熊入町字竹ノ下

地図
P.141 5

左玄門の装飾（同心円、馬、舟）

熊入町にある六世紀後半に築かれた円墳で、巨石を使用し横から入る構造（横穴式石室）の装飾古墳です。

江戸時代の書物『鹿郡舊語傳記』に「君塚」と紹介され、大正時代の『鹿本郡誌』には、概略「何人の墳墓なるか不明なれども其の君塚の名のある高貴の人の墓ならん、俗に辨慶が穴という、入り口の左側に馬の壁画あり、猶内部精査せば新発見すべきものあらん」と記され、早くから盗掘を受けていたことが分かります。昭和三十一年、原口長之先生と山鹿高校考古学部の調査

空から見た弁慶ヶ穴古墳

弁慶ヶ穴古墳入口

右玄門の装飾（同心円、菱形、連続三角）

前室右壁の装飾（鳥、棺、馬、舟）

で、ゴンドラ形の船に乗った馬の絵などが発見され、一躍注目されるようになりました。

壁画の特徴は馬と船の数が多い点です。船に棺（ひつぎ）を乗せその上に鳥が止まった装飾は、死者を運ぶ様子を描いたものと見られます。また、墓の番人を浮き彫りにした珍しい像もあります。須恵器・馬具など古墳からの出土品は、博物館に展示中です。

（前田）

羨道左壁の人物浮彫

国指定
史跡

方保田東原遺跡

かとうだひがしばるいせき　国―6

所在地
方保田
字東原ほか

地図
P.141 6

遺跡上空写真　東側から

方保田東原遺跡地図

菊池川とその支流の方保田川に挟まれた台地上に広がる弥生時代後期から古墳時代前期（今から約一七〇〇～一九〇〇年前）に繁栄した大集落遺跡です。

これまで五〇回を超える発掘調査の結果、幅八メートルにも及ぶ大溝をはじめとする多数の溝跡、甕棺（かめかん）や石棺などの墓、三五〇軒を超える住居跡などが見つかっています。また出土品では、全国で唯一の石包丁形鉄器や、特殊な祭器とされる巴形銅器（ともえがたどうき）や鏡など、多くの青銅製品、鉄製品が出土しています。特に、鏡の出土数は合計九点にも及び、全国でも屈指の数を誇ります。このほか、当時の中国の皇帝も

重なって見つかった住居跡群（47 次）

大溝（11 次調査）

溝内の土器（40 次調査）

中国製の鏡

祭祀に使われた土器が大量に捨てられていた竪穴（19 次調査）

ガラス玉、勾玉

石杵

珍重した「朱（しゅ）」（赤色の顔料）を精製する道具（内側が赤い土器や磨り潰し用の石杵（いしぎね））も見つかっているなど、全国でもあまり例のない珍しいものが多種多彩に数多く発見されています。これらの一部は国や熊本県の重要文化財に指定されています（一二、四二頁参照）。

方保田東原遺跡は、菊池川沿いの山鹿一帯を治めた中心勢力であったと考えられます。

（事務局）

国指定
史跡

岩原古墳群

いわばるこふんぐん

国―7

所在地
鹿央町
岩原字塚原

地図
P.141 7

写真提供　熊本県教育委員会

写真中央が岩原双子塚古墳

台地上に古墳群、崖面には横穴群がある

前方後円墳の双子塚（ふたごづか）を主墳として、下原（しもばる）・寒原（そうばる）・馬不向（うまむかず）などの円墳を総称して岩原古墳群といいます。

主墳の双子塚古墳は、深さ一メートル、幅約十メートルの周溝をもつ前方後円墳で、ほぼ完全な原形を保ち、雄大で優美な姿を残しています。全長は一〇七メートル、後円部は直径五七メートル、高さ九メートル、前方部幅四九メートル、くびれ部の幅三六メートルで、古墳の面積は約四九〇〇平方メートル、周溝の面積四八〇〇平方メートルあまり

写真提供　熊本県教育委員会

県立装飾古墳館

円墳群

の広大なスケールになっています。昭和五十四年の寒原地区の圃場整備の際に、五基の石棺が出土し、平成二年の装飾古墳館建設地調査では四基の石棺が発見されました。また、平成三年には双子塚古墳周溝確認調査が実施され、円筒埴輪片など多数が採取されています。

周辺に広がる陪塚（ばいちょう）も三〇メートル、高さ四メートル余りの円墳で、ほぼ原形を保っています。いずれも古墳時代中期のもので、付近一帯を治めた豪族の墳墓と考えられます。

（多田隈）

国指定
史跡

鞠智城跡

きくちじょうあと

国―8

所在地
菊鹿町
米原ほか

地図
P.140 8

米倉と鼓楼

歴史公園　鞠智城

天智二（六六三）年、朝鮮半島における白村江の戦いに敗れた大和政権が、唐・新羅と対峙しながら、国を防衛するために築いた朝鮮式山城です。七世紀後半ごろから、およそ二〇〇年余り存続したと推定されています。

これまで、熊本県教育委員会を中心に発掘調査が行われていて、数多くの貴重な発見がありました。特に、八角形鼓楼、米倉、兵舎、武器庫などの建物跡はこの城の役割を示すもので注目されます。鞠智城は、大宰府や大野城などへ物資や兵士を補給する「支援基地」としての機能を持っていたようです。

城の面積は約五五ヘクタールと広大です。周囲には土塁を巡らせて守りを固め、内部には、掘

板倉

米倉

百済系菩薩立像

発掘時の八角形建物跡

貯水池跡

写真提供　熊本県教育委員会

立柱建物や礎石の建物が建っていました。現在、合計七二軒の建物跡が見つかっています。このほか、水や木を貯えておくための池跡が発見され、数多くの木製品や建築部材のほか、百済系菩薩立像が出土しました。この仏像は全国的にも大変珍しく、百済系渡来人との関連を示すものとして注目される貴重な資料です。また、百済との関係資料としては、軒丸瓦や木簡も出土しています。

平成六年度から整備が本格的に進められ、八角形鼓楼や兵舎などの建物が復元されています。

現在、熊本県、山鹿市、菊池市が連携して、鞠智城跡の国営公園化を目指し、運動を展開しています。（事務局）

国指定
史跡

隈部氏館跡

くまべしやかたあと

国―9

所在地
菊鹿町
上永野

地図
P.140 9

建物礎石群と隈部神社

建物礎石群

６月にはヤマツツジが見ごろとなる

堀切

隈部氏館跡は、天正十五年（一五八七）、肥後国主の佐々成政の支配に反旗を翻した肥後国衆一揆の中心人物である隈部親永が、隈府城（現菊池神社一帯）に移るまで本拠地としていた館跡です。

江戸時代の地誌には、猿帰城、永野城、隈部城、長野城などの城名で記載されています。

館跡を地元では、隈部さん、お屋敷、館上がりと呼んでいます。

県北の標高一〇五二mの八方ケ岳を中心とする高山から裾野をおろした、標高三四〇～三七〇m前後の山腹に

枡形

庭園跡

隈部氏館跡から猿返城跡を望む

北側の堀跡

築かれ、中心部は長軸一〇二m、短軸七八～八二mの広さを有する平場があります。

館跡には、伝馬屋跡の敷地、主郭南の大規模な堀切、野面積み石垣の枡形遺構の虎口、主郭へ上がる九段の石垣が現存しています。

主郭には、礎石建物群が三棟並んでおり、それぞれ公式の場である主殿、社交や遊興の場である会所、蔵や台所の建物と推定されています。会所の東側には立石を配した泉水を有する庭園遺構と、裏側には二つの堀切、西側斜面には十三の小段群を見ることができます。

外縁地域には二つの砦跡が築かれています。北側の標高六八二mの高山にある、城床と呼ばれるのが猿返城跡です。この南東の標高七七五mの高山には、米の山城跡が存在しています。二つの砦跡は約二キロ離れた尾根道で結ばれています。

現在館跡の中心区域は、検出遺構をいかした歴史公園に整備され、季節に応じた自然の変化が感じられる場所となっています。

（竹下）

国指定
特別天然記念物

相良のアイラトビカズラ

あいらのあいらとびかずら　国―10

所在地
菊鹿町
相良

地図
P.138 10

アイラトビカズラの花

棚内部

遠景

アイラトビカズラは常緑のマメ科の植物です。ツルの太さは一〇㌢以上にもなります。葉は、三枚の子葉が互い違いに生えていて、中央の葉は長さ七～一五㌢の楕円形で、両側の小葉は下に張り出した卵型をなしています。葉の色は全て緑色ですが、上面は特に光沢のある深緑色になっています。

毎年五月、暗い紅紫色の大きな花が、ブドウの房のように垂れ下がって咲きます。花は長さ約七㌢の大型の蝶の形をしていて、独特な香りを放ちます。

昭和三十七年、熊本大学薬学部により、人工授粉で結実に成功し、中国揚子江の中流域に分布する常春油麻藤と同じ種類であることが分かりました。

開花は、昔は極めて稀でしたが、最近はほぼ毎年見られます。

（事務局）

国指定
天然記念物

菊池川のチスジノリ発生地

きくちがわのちすじのりはっせいち　国―11

所在地
分田橋～山鹿大橋

地図
P.141 11

チスジノリ生態

菊池川

標本

チスジノリは、冬になると生える川藻の一種です。形が血管に似ていることから、この名がついています。明治四十四年、鹿児島県の川内川中流で初めて発見され、非常に珍しい日本特有の川藻として、大正十三年に国の天然記念物に指定されていました。

山鹿では古くから、寒ノリや川ノリなどと呼んで、酢の物や佃煮にして食べていました。昭和二十三年に、鹿本高校の松尾繁樹教諭が、菊池川の方保田付近で確認し、その後大学などの調査でチスジノリであることが確定しました。そして昭和三十四年、チスジノリ生育の北限地ということで、菊池川の分田橋から山鹿大橋までが、「チスジノリ発生地」として国の天然記念物に指定されました。

川底に石が多く、水深一メートル程度の、水がよく流れる場所に多く生えているようです。（事務局）